熊野の森から

怪しの熊野

其の七八

「本宮町の怪異（其の七）」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

本宮の武住谷には、さまざまな怪異話が伝わる。それだけ、武住が山奥であったということなのであろう。写真は廃校となった皆地小学校の武住分校。

本宮には、まだまだ多くの怪異話が伝わる。天狗（てんぐ）話だけでもいくつもある。そのいくつかを紹介すると、例えば、ある日、突然行方不明になった人が、4、5日して帰ってきて「天狗にさらわれたが、いろいろと面白かった」と言ったという話がある。各地に伝わる天狗による誘拐の話とだいたい同じだ。また、代々医者の家の先祖が峠の近くで、天狗を刀で斬った。刀についた血を桜地蔵の泉で洗った。このため、この医者から薬をもらっている者は、この泉の水を飲んではならない、という言い伝えがある。たたりでもあったのだろうか。この桜地蔵は、熊野古道の小雲取を志古の方に向い、万才峠を少し下ったところにある地蔵さまだと推察される。その他にも、いくつもの天狗話が伝わるが、天狗の姿は修験者とも重なり、それだけ多くの修験者が本宮を訪れていたということなのだろう。

本宮の各地で見られたという「三体月」は、旧暦11月の二十三夜月が三つに分かれる現象であったという。月の出は深夜であり、そもそも二十三夜月を見ること自体が少ない。写真は深夜2時に撮影した二十三夜月。

武住谷の上流に「歌うたわずの滝」という滝があったという。そこで歌を歌うと、若い娘の姿をした「うたおんな」が現われて滝つぼに引き込むから滝の近くでは歌ってはならない。昔、若い女巡礼が歌いながら滝つぼに身を投じたことがあり、その霊の仕業だといわれている。武住谷の奥には、段瀑（だんばく）で落差60㍍もある五段ノ滝や、出合下の滝、その他の無名瀑もある。「歌うたわずの滝」は、これらのどれかなのか、今では埋まってしまったのか、話はそこまでは伝えていない。また、武住の東にある平治の滝には、滝と武住の「がまの滝」を行き来していた滝の主の大蛇がいたという話もある。前回のコラムで書いた牛鬼（うしおに）もそうであったが、滝つぼには様々な怪異がすみ着くものだ。

また、以前にも紹介した「三体月」の話も、本宮のいくつかの地区で伝わっている。文字通り月が三つに分かれる現象で、大瀬では数十年前に目撃されているという。旧暦11月23日に出るとのことで、深夜にかけての月待ち神事も行われていたようだ。旧暦の11月23日ということは、二十三夜月であり、月の出は深夜となる。しかも冬だ。山上で寒さに耐えながら月を待ったということから、さぞかし神聖な現象であったことがわかる。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。